

地方創生最前線

生涯活躍のまち

2021.07

16

関係性は
専門性を
超える

INDEX

関係性は専門性を超える

- ごちゃまぜは分野横断的に / 本永 愛さん 2
- 人間に対する深い洞察力が現れた建築を目指して / 土用下 淳也さん 5

BOOK REVIEW

- 『不安ウーマン 医療的ケア児のシングルマザー 明日を生きていくために』 7

——本永さんの「沖縄でごちゃまぜのコミュニティをつくる」という思いは幼少期に遡るそうですね。

私が小学生のころ一時期住んでいた那覇市首里石嶺町にはマンモス団地となる市営住宅があり、貧困家庭にある子どもたちも多く暮らしていました。玄関に食器が転がりゴミだらけで、今でいうネグレクトの状態を垣間見たこともあります。子ども心に衝撃を受け「大人は何もしてくれないの?」と悲しい思いになりました。中学生になったときに哲学者・鈴木大拙の「人は環境の生き物」という言葉に触れ、住まいの在り方を学んだことが建築を目指した原点です。

——市営住宅内のコミュニティはあまり機能していなかったのですか。

自治会として団地内を掃除する活動などがあったのですが、親の代わりに子どもだけが参加するケースもありました。いまでいうヤングケアラー*です。当時はそういう

言葉もなく、子どもたちは親代わりとなり、家族の世話に時間を費やすことで、自身が本来向かうべき人生の夢を奪われた状態にあることに気づきません。普通の家庭のように見えていても、ドアを開けて中を覗くと、生活全部を背負っている子どもたちがいたりする。彼ら、彼女たちに社会保障の制度が行き届かない現状があります。

(注)*厚生労働省によると、「家族やきょうだいの世話、家事、労働など本来大人が担うような役割を日常的にしている子」のこと。2021年に同省が行った初の全国調査では中高生の20人に1人がヤングケアラーであるという結果が出ている。同調査では家族の病気や障害が理由でケアを必要としている場合だけでなく、幼いきょうだいを世話する場合も含めている。

——ひとり親家庭の子どもたちにヤングケアラーが多いと聞いていますが。

沖縄県は全国でも貧困率、離婚率が高く、ひとり親でダブルワーク、トリプルワークに追われる状況で、子どもたちが家事や介護などの世話をするヤングケアラーとなるケースが多い。親がいない間、子どもたちは祖父母に預けられ

ごちゃまぜは 分野横断的に

本永 愛さん
MOTONAGA Ai

1997年沖縄職業能力開発大学校住居環境科卒業、株式会社渡久山設計建築部入社。福祉と建築の融合を目指し視野を広げるため新聞記者・編集者に転身。再び渡久山設計へ戻り、建築設計者との協議による「ごちゃまぜの拠点」を県内に広げるため奔走。生涯活躍のまち推進協議会正会員、沖縄県「おきなわ未来プロジェクト」会員、子どもたちの夢点火プロジェクト「ドリスカッ!」サポーターを務めるほか、さまざまな地域活動に取り組んでいる。

ることも多いのですが、高齢のため孫の面倒が十分にみられないことがあります。当時の記憶として忘れられないのが、仲良しだった上級生のお姉さんが就寝前に歯が抜け、出血が多かったにもかかわらず、高齢のおばあさんは病院に連れていけず、出血多量で亡くなったことです。親が不在ゆえに4階のベランダから幼児が落ちてしまうという痛ましい事件もありました。

——そうした経験から建築を目指すわけですが、一度、業界から離れてますね。

卒業後、「人・自然・文化の融合」を理念とする株式会社渡久山設計に入社し、建築設計の仕事をしていましたが、ハードの部分だけに関わることへの疑問もありました。建築は公共性の高い意義のある仕事ですが、ソフト面からも地域の暮らしにおける課題を理解し、解決を考えたいと思って

いました。

そんなときに沖縄タイムスの連載特集の企画チームとして、センシティブな社会問題に関わる経験を得ました。子ども時代に、親や親戚から暴力や性的虐待を受けたり、ひどいいじめに遭ったことで心的外傷後ストレス障害(PTSD)に苦しむ人々取材し、当事者同士のコミュニティや専門家につなぐなど、社会全体で考え解決していけるよう記者らとともに働きかけました。そうした縁から、新聞業に転職することとなり、10年ほど記者・編集者として従事しながら、住まいやまちのバリアフリー化やQOLの向上、シングルマザーの自立につながる企画を発信するなど、沖縄社会の営みを広く体験するライフワークを得ました。そして2016年、少子高齢化に向かう沖縄社会に必要な医療、福祉、教育に関するさまざまな施設環境づくりの企画・構想をもって、渡久山設計に戻ったのです。

——そこで「ごちゃまぜ」の考えを知ったのですか。

私たちが学んできた建築設計のあり方の多くは、機能的な動線や間取りを整理し、使いやすいよう収めることに神経を注ぎます。ところが、2017年の春に見学させてもらった社会福祉法人佛子園の各施設は、同法人理事長の雄谷良成さん(公益社団法人青年海外協力協会会長、当協議会会長)の「自然な偶発性」を設計する考え方が反映されており、人と人の出会いをつくる巧妙な空間づくりに感銘を受けました。

そこでは高齢者、障害者、子どもたちといった世代を超えた出会いがあり、フィーリングが合えば新たな展開が起こる。そして建築空間のもつ優しさや温かさがそれを後押しする。児童福祉施設を多く手掛けてきた渡久山設計の運天社長もまた、社会的に弱い立場にある方々のための建築について考えてきたからこそ、その手法に感動していました。

そして2017年の秋、渡久山設計設立45周年事

今号に登場いただく本永愛さんは、子どものころから抱き続けてきた思いを「ごちゃまぜ」という形で具現化しようとしています。自らの活動を通して、沖縄特有の社会的背景から生まれた課題の解決には、建築や福祉の融合という専門を超えた視点が必要との考えに至った本永さんの軌跡についてお聞きしました。

(聞き手 芳地隆之)

開放したオープンスペースを創出したことで、だれもが集えて小さな子どもも安心して遊ばせられるようになっていきます。

最近コンビニにATMが設置されるなど、まちなかの地方銀行の役割が問われています。地域に根差した銀行を運営していくため、建物を地域に開放し、事業者同士が交流したり、相談できたりする場所として活性化する考えも反映されています。おかげさまで、2018年に沖縄建築賞、グッドデザイン賞、翌年には一般社団法人日本建築士事務所協会連合会による日事連建築賞優秀賞を受賞しました。

——現在、準備が進んでいる施設はどういうものですか。

社会福祉法人若杉福祉会と計画する、子ども第三の居場所「コミュニティモデル」を含む多機能型事業所です。同法人は現在、若杉保育園を運営しているのですが、長年に

業として、雄谷さんを沖縄へ招いて講演会を開催したところ、収容人員300人のタイムスホールに500人近い人が集まり、立ち見ができる盛況にその必要性を実感しました。

——渡久山設計が担当した「オアシスバンク」にも魅力的なコミュニティ空間がデザインされていますね。

琉球銀行牧港支店「オアシスバンク」は、地方銀行を都会のオアシス的な場所として位置づけ、「これまでにない銀行を」というコンセプトから生まれました。大きな日陰をつくり、その下を緑化し、潤いある休憩所を設け、地域に

佛子園・雄谷良成理事長(左)と。



渡り、多世代交流や地域のにぎわいづくりに尽力しており、すでに「ごちゃまぜ」機能をもっていました。新たな施設はさらに、児童発達支援のほか、地域のリビング、学習室、音楽堂や子ども食堂、ウェルネス、キャンプ広場などを整備し、地域住民に開放した居場所になります。

——とはいえ、ごちゃまぜを進めようとなると、行政などの縦割りの壁に直面しませんか。

行政からの補助金は、子ども、障害者、高齢者と対象によって担当部署が分かれてしまう難しさがあります。そのためなかなか前に進まず、身近な協力者の心が離れていくこともありました。協力者をもう一度引き寄せるためには、生涯活躍のまちづくりに取り組む全国の様々な事例を学び、同じ志をもった人々と「成功するまで諦めず」より良い案を提案し続けることだと思っています。

渡久山設計では異業種ラボを設け、魅力的な企画を発信し、志をともにする事業者同士がパートナーシップを結んでいくことを目指しているのですが、そのためには分野横断的に動ける人との関わりが求められます。そこで志をともにする者が共同で代表を務める一般社団法人ごちゃまぜ沖縄の中に同ラボを位置づけ、活動を活性化させるところです。

——那覇市民ごちゃまぜミュージカルを公演されるそうですね。

那覇市が市政100周年事業で公募し、若杉福祉会とごちゃまぜ沖縄が申請代表となり市民ミュージカルを提案しました。シナリオ、演出、舞台装置など、すべて市民がかかわり行うというものです。その過程はドキュメンタリー映画にもなる予定です。実行委員長を務めるのは若杉福祉

会の屋宜貢さんで、沖縄のエンターテインメント業界にも長く携わっておられる方です。

——福祉とエンターテインメントの組み合わせがいい。

既存の福祉のイメージを一新し、楽しい環境のなかで、地域のみんなと楽しく遊び、癒され、元気になる場所になればと思います。私たちは公益社団法人青年海外協力協会(JOCA)沖縄拠点とも連携させてもらっています。途上国支援の経験のあるスタッフが運営する「おきなわ世界塾」は子どもたちの視野を広げるイベントの参考になります。いずれ、世界のウチナーンチュ(県系人)との交流やビジネスの懸け橋になってくれるかもしれません。そうした活動が「ごちゃまぜ」を海外にも広げていくことにつながり、沖縄が「幸福度の高い島」として映るよう働きかけたいと思います。



琉球銀行牧湊支店「オアシスパーク」の外観



ごちゃまぜ沖縄施設モデル案(最初の提案イメージ)

人間に対する 深い洞察力が現れた建築を目指して



ノルウェーの建築家ジャスティン・エドワードセン氏（中央）、故西川五井建築研究所会長（右）と。

土用下 淳也さん DOYOSHITA Junya

1983年石川県小松市生まれ。北海道大学工学部社会工学系、千葉大学工学部デザイン工学科建築系を卒業後、佐藤宏尚建築デザイン事務所、五井建築研究所を経て、2021年にkyma設立。

社会福祉法人佛子園ならびに公益社団法人青年海外協力協会(JOCA)と連携し、「ごちゃまぜ」を体感できる建物の設計を手掛けてきた土用下さんは、師である故・西川英治・株式会社五井建築研究所会長の遺志を継ぐべく、同社のまち設計室を分社化し、株式会社kymaを立ち上げました。“kyma”とはギリシャ語で「うねり」という意味。「ごちゃまぜ」の建築、まち、コミュニティが次代のうねりとなっていくように――土用下さんに社名に込めた思いを語っていただきました。

ごちゃまぜの建築とは

表題は私が師と仰いでいた故・西川英治会長(今年の2月27日に死去)の言葉です。西川は母校である神戸大学工学部建築学科での博士論文『地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究～ごちゃまぜ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクト・Share金沢・B's行善寺・輪島KABULETの事例から～』のなかで、『『ごちゃまぜ』とは『人々が混ざり合う中で相互に関わり合い刺激し合う関係性を創り出し、それまで体験し得なかったような共感性を互いに呼び起こすことで、前向きに生きようとする心の様態を醸成することである』と綴っています。私たちにはもっと平たく、「きみはこの建築でこのまちをどうしたいと思っているのか?」と問いかけていました。そこに住む人が心地よさを感じられるか、人と人が自然に交流できるようになっているのか。かつて作家性の強い建築物を手掛けてきた西川が、佛子園の雄谷良成理事長と出会い、共同作業を通して得てきた視点です。

日常をさらなる高みへ

「生涯活躍のまち」づくりにおいては、ソフト(人)とハード(建築)は対立するものと捉えられがちです。そして前者



複合施設「SONATARUE」(群馬県沼田市)

をベースに考えるべきだといわれますが、建築の外を歩く人と中にいる人の視線を合わす、室内の通路を行き交う人が少しだけ譲り合うくらいの幅にする、保育園の遊具を、踏み外したり、飛び降りたりしても大きな怪我をしないギリギリのところで組むなど、建築や空間によって、そこを訪れる人々の心地よさを演出し、交流を促すことができると考えています。

私たちは自らが目指すものとして、「多様性の抱合」「地域性の尊重」「普通性の先へ」の3つを掲げています。「多様性の抱合」とは、人の行動や考え方は様々であるということからスタートし、異なるものを分け隔てるのではなく、抱き合わせることによって新たな出会いを生み、豊かな人間関係を育てていくようにすること、「地域性の尊重」とは、そこに住む人となりだけではなく、その人が日々の生活を営む地域の歴史や文化、コミュニティから滲み出るその土地の空気にも敬意を払うこと、「普通性の先へ」とは、奇抜なアイデアや斬新な趣向を前面に出さずとも、当たり前だと思われることや既成の概念を深く掘り下げ、柔軟な発想を通していくことで、これまでの日常をさらなる高みへ導いていくことです。

人が写っていないじゃないか

佛子園やJOCAの施設はしばしば紹介されているので、

ここでは群馬県沼田市にある複合施設「SONATARUE(ソナタリー)」を紹介します。「ごちゃまぜ」の思想に共感した施主と私たちが一緒につくった建築で、子どもたちの遊び場となる中庭を鉄骨造2棟、木造2棟が囲むヒューマンなスケールの空間になっています。「SONATARUE」とは地域に心のハーモニーがあふれ、人を繋ぐ場所、あなたらしさを追求できる場所にいるという思いから名付けました。また、最近竣工した石川県小松市の平屋の住宅は、家族の拠り所となる広間を各諸室が囲むシンプルなプランで、自然と家族が広間に集まれるように計画しました。また、敷地の段差を利用して車庫を納め全体をひとつの単純な切妻屋根で覆うことで、無駄がなく、親しみやすい外観としています。

西川は建物が完成すると、かつてはそれを「作品」としてカメラに収めていました。作品には人間は映りません。ところが、雄谷理事長のいう「ごちゃまぜ」の建築に携わるようになってからは、建築だけを収めた写真を見せると、「人が写っていないじゃないか」とダメ出しするようになりました。

当社の所在地は石川県金沢市の東山地区です。金沢三大仏のひとつに数えられる丈六の釈迦如来立像を安置している蓮昌寺の山門から、まちなかへ続く通りの途中にある古い町家を改修した建物が事務所になっています。ここから全国に「ごちゃまぜ」の建築とまちを広げてまいります。

石川県小松市の平屋の住宅



BOOK REVIEW



著者 福満 美穂子
ぶどう社
『不安ウーマン』
医療的ケア児のシングルマザー
明日を生きていくために

寝たきりでてんかん発作や重度の知的障害がある娘を、著者はピョンちゃんと呼ぶ。かつての人気漫画『ど根性ガエル』の主人公ひろしのTシャツに張り付いたカエルのピョン吉になぞらえた。2人は一心同体という思いを込めた呼び名で、前著『重症児ガール ママとピョンちゃんの きょうきょう あした』（ぶどう社）では、母と娘の日常生活やピョンちゃんの成長過程で思うところなどが綴られた。

第2作となる本書は、Tシャツからピョンちゃんが離れていくとする物語だ。

そこでは様々な壁が立ちはだかる。夫と離婚した著者をまず悩ませたのは日本の「世帯主」主義。別れた妻が夫の戸籍から抜け、子どもの親権者が母親であることを両者が合意していても、娘の戸籍は父親の戸籍のまま。母と娘の戸籍をつくるためには家庭裁判所に申し立てをしなければならない（そうしないと娘への様々な手当を母親は受け取れない）。

次に困窮。重症児のいるシングルマザーはなかなか職に就くのが難しい。娘への諸手当が振り込まれるのは3カ月あるいは4カ月ごとだったりする。貧乏でも幸せよね、なんて、とてもじゃないが言っていられない。そこで著者は重症児の放課後等デイサービス、それも未就学児から高校生までを受け入れる「多機能型」の通所支援事業を始める。

こうした過程で著者は母娘が自立していく必要性を認識していく。そのために自分とピョンちゃんの状態をオープンにし、ヘルパーさんをはじめ地域の人たちの助けを借りるのだが、そこにあるのは、助ける側と助けられる側という関係ではない。ピョンちゃんとはときにヘルパーさんを笑わせたり、幸せな気持ちにさせたりするのである。

2人は絶対に感染できないという緊張感のなかにいるが、障害児の通所支援事業は原則開所しており、「買い物も普段から週一回、飲み会や食事は年数回行けばいいほうですし、マスクも夏場を除いていつもして、手洗い、うがい、アルコール除菌は当たり前」という生活はコロナ禍前から変わっておらず、たくさんの人がいま「ピョンちゃんスタンダード」を体験していると著者はいう。

そう、私たちとピョンちゃんは同じ地平にいるのである。

Information

●『研修テキスト』『報告書』が公開されました。



昨年度、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の受託事業として当協議会が実施した「生涯活躍のまちアドバイザー」による地域支援の活用方策に関する調査研究事業の『実績報告書』ならびに『「生涯活躍のまち」アドバイザー研修テキスト』が内閣官房・内閣府総合サイト「地方創生」にアップされました。右記QRコードよりダウンロードください。

講師の方々、受講者の皆様ほか、関係各位には心より感謝申し上げます。



▲実績報告書



▲「生涯活躍のまち」アドバイザー研修テキスト

●小誌『生涯活躍のまち』を購読しませんか。

今年度より、毎月のデータ配信とリニューアルした小誌は、全国で「生涯活躍のまち」に取り組んでいる自治体や事業者の声を紹介しています。小さなメディアですが、お互いの経験や情報を交換するツールとして、地域の誰もが居場所と役割をもち、最期まで安心して暮らしていけるコミュニティづくりに貢献できればと思っています。お近くの方にも小誌をご紹介いただければ幸いです。

1部300円（税込・送料込）です。購入ご希望の方は、当法人ホームページでバックナンバーをお確かめのうえ、下記までご連絡ください。



『生涯活躍のまち』の購読お申込み、お問い合わせ

電話 0265-98-0481

ウェブサイト <https://shougaikatsuyaku.town/>

※携帯の方は左のQRコードをご利用ください。



編集後記

今号では「ごちゃまぜ」との出会いによって、建築に対する考えを進化させている2人を紹介しました。ハードとソフトの二項対立的な発想を超え、人が心地よく生きる空間とはどういうものかを常に考えながら、仕事をされています。ブックレビューで取り上げた『不安ウーマン』の著者・福満さんは重症児をもつシングルマザーとしての日々の奮闘から、医療と福祉の融合をさらに進めることで介護職の認知や貢献度をもっと評価されるべきだと述べています。今号のタイトルは、福満さんが自著で引用したある医師の言葉を拝借しました。これは本永さん、土用下さんの活動にも共通するものだと思います。

（芳地隆之）

生涯活躍のまち推進協議会では、 ひろく会員を募っています。

私たちは日本版 CCRC 構想有識者会議で出された「生涯活躍のまち」の課題・方針の具現化を支援する役割を担うため、2015年10月9日に任意団体として発足。2016年2月に一般社団法人化されました。人口減少、少子高齢化が進むなか、持続可能な地域コミュニティをつくっていくにはどうしたらいいか。そこに立ち上がってくる様々な課題と向き合う自治体の皆様、地方創生の事業化を目指す民間企業や団体、あるいはまちづくりに関心をおもちの個人の方々に、私たちは、各地域の特性に合った「生涯活躍のまち」を推進していくための支援を行っています。

国が、市町村が、事業者が、そして多くの思いある個人が集い、情報交換をし、知恵を出し合うことで課題解決の道筋をつけていく。生涯活躍のまち推進協議会は、そんな方々のためのマッチングの場を構築することを目指していきます。

正会員	年会費 15 万円
利用会員	年会費 10 万円
賛助会員	年会費 1 口 1 万円
アドバイザー会員	無料

一緒に生涯活躍のまちを
つくっていきましょう。



（一社）生涯活躍のまち推進協議会

0265-98-0481

✉ info@shougaikatsuyaku.town

<https://shougaikatsuyaku.town/>



〒399-4112 長野県駒ヶ根市中央 9 番 7 号（公社）青年海外協力協会内